

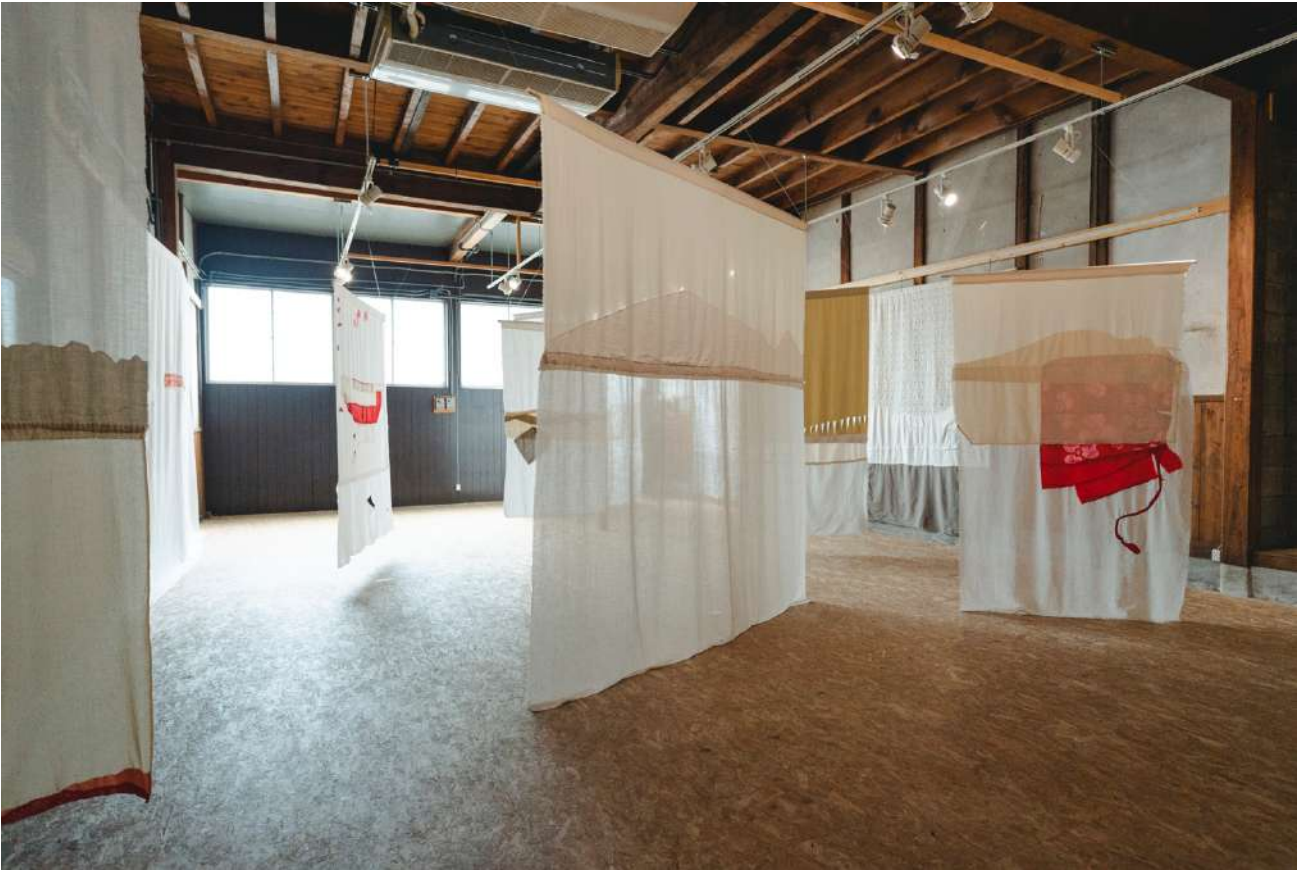


撮影：脇田 友

## ソノチ × ROBIN OWINGS 『あなたはきえる』 レポート

### 目次

1. 上演記録
2. 創作過程を振り返って
  - ・ 中谷和代、RobinOwings ステートメント
  - ・ 出演者コメント
  - ・ スタッフ対談
3. 作品に寄せられた声
  - ・ 高木日向子氏 ポストパフォーマンストーク
  - ・ 高内洋子氏 寄稿文
  - ・ 福井裕孝氏 評論文
  - ・ アンケート抜粋
4. カンパニー紹介、ポートフォリオ

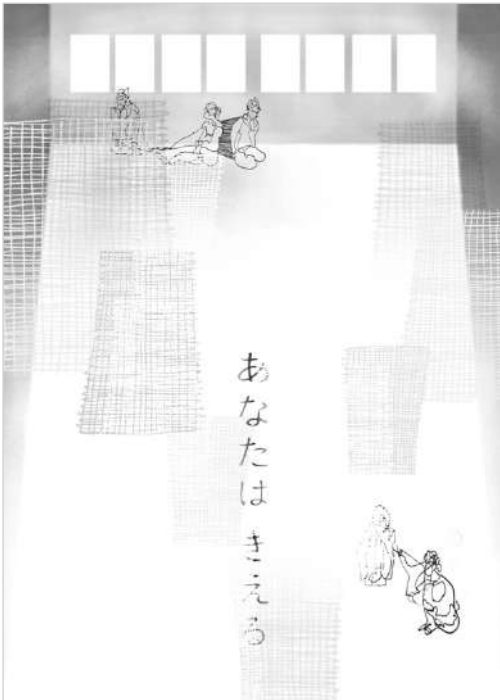




撮影：脇田友

# 1. 上演記録

## ▼基本情報



ソノノチ×Robin Owings

### 『あなたはきえる』

川の流れと同じように、私たちは刻々と変化し、生まれ変わっているのだとすれば、ひとつ前のあなたは生きていて、今のあなたもやがてきえる。きえたものが燃（よ）り合って、あなたになる。あなたは生きてしまったものでできている。

ソノノチの最新作は、Robin Owings 制作のインスタレーションとの共演。かつて織物工場だったこの場所から、無常の風景へ漕ぎ出すように。ランドスケープシアターに続く、新作パフォーマンス作品。

#### 【パフォーマンス/上演日時】

2023年

7月20日(木) 17:00★

7月21日(金) 13:00/17:00☆1

7月22日(土) 13:00☆2/17:00

7月23日(日) 13:00

上演時間：約60分

★ = オープニングレセプション

☆1 = ポストパフォーマンストーク

ゲスト：高木日向子（作曲家）

☆2 = ポストパフォーマンストーク

ゲスト：Robin Owings（本作美術制

#### 【インスタレーション展示/開廊日時】

7月21日(金) 14:00~16:00

7月22日(土) 10:00~11:30、14:00~16:00

7月23日(日) 10:00~11:30

+ 各上演終演後にも開廊

#### 【会場】

アトリエみつしま Sawa-Tadori（京都市北区紫野下門前町44）

### 【料金】

一般：3,000円

25歳以下：2,500円

高校生以下：1,000円（前売・当日）

### 【クレジット】

構成・演出：中谷和代 美術制作：Robin Owings

出演：藤原美保、芦谷康介、宇津木千穂、岸本昌也、筒井茄奈子

舞台監督：脇田友 演出部：neco 楽曲製作：瀬乃一郎 衣装：清川敦子

宣伝美術：ほっかいゆ r ゐこ 制作部：渡邊裕史、田中直樹、永澤萌絵

アーカイブ：柴田惇朗

協力：一般社団法人フリンジシアターアソシエーション、原泉アートプロジェクト、  
サファリ・P、スピカ、劇団三毛猫座、廃墟文藝部、日向花愛、森岡りえ子

主催・製作：ソノノチ/合同会社 nochi

supported by KAIKA 芸術文化振興基金助成事業

### ▼観覧者数

延べ195名（上演・展示を含む）



## ▼クリエイションの概要



230708：モデルを使いながら舞台美術を仮組みする

ソノノチにとって『たちまちの流（ながれ）』（2020年1月、京都芸術センター）以来、実に3年半ぶりとなる屋内でのパフォーマンスとなった本作。創作プロセスにおいては活動拠点・京都での創作ということもあり、滞在が伴わない創作が行われた。計25回の稽古はソノノチがアソシエイトカンパニーでもあるKAIKAを中心に行われ、そこには演出、パフォーマーをはじめ、クリエイションメンバーが多くのアイデアを持ち寄り、試し、磨いていく場となった。また、稽古の外では各部署による頻繁な連絡とミーティングが毎日行われていた。

本作の稽古ではアイデアの外在化と創作のサイクルがみられた。具体的には、各稽古の序盤で行われるフリートークの時間、そしてそこで出たアイデアをカードに記して記録する、というものだった。これらのアイデアは「パーツ」と呼ばれるパフォーマンスの断片を作るために使われることもあれば、そのまま忘れられることもあった。この「忘れる」ということが創作プロ

セスの一要素であることを受け入れる、という姿勢も、『あなたはきえる』のコンセプトとしてメンバー間で共有された。



話す、思いつく、作る（忘れる）。そうしてできたパーツを組み合わせた「通し」は6月から断続的に実施された。パーツは往々にして一人か二人のメンバーによって作られたため、パーツは相互に関係するようでは関係しない断片的なものであり、それを組み合わせてできたものも、パッチワーク的でフリーフォーム、脱中心的なものだった。このような作り方が『あなたはきえる』が持つ、独特の手触りのようなものを生み出しているのだろう。

最後に、本作はロビン・オウイングス（以下ロビン）をはじめとする、何人ものアーティストとの稽古場内外での協働により完成したものである。初めての共作であるロビンとの協働は、テニスのラリーのようにアイデアや習作を互いに打ち合うプロセスとなった。詳しくは『クロストーク（スタッフ対談）』で語られているので、ぜひ参照されたい。（柴田）



撮影：脇田友

## ▼制作スケジュール（2023年）

2023	活動	備考
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●京都西陣での織物体験</li> <li>●会場見学</li> </ul>	⇒ファブリックを用いる、という当初のコンセプトに従い、リサーチとして織物体験を行った 
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●クリエイションメンバーの顔合わせ</li> <li>●会場の見学（ロビンと）</li> </ul>	⇒顔合わせでは「クリエイションガイドライン」の共有を行い、ハラスメントのない環境づくりのため理念の共有をした
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●クリエイション開始</li> <li>●チケット販売開始</li> <li>●パフォーマンス稽古</li> <li>●会場訪問（5月29日）</li> </ul>	⇒クリエイションに際して、演出からは「コンセプトノート」が共有され、その内容は稽古毎に更新された ⇒稽古では毎回集まったメンバーが日々体験したことや考えていることを共有する時間が設けられ、その内容から創作に繋がりうるアイデアを記した「アイデアカード」が制作された  
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パフォーマンス稽古、インスタレーション制作</li> <li>●広報の本格化</li> <li>●グッズ作成開始（ルームミスト、コラージュ）</li> <li>●会場訪問（6月10日）</li> </ul>	⇒これまでにソノノチ内に培われてきた風景の中を「歩く」メソッドの共有から稽古はスタートした ⇒6月15日にはチケット以外にも「いちごの差し入れ券」を販売、不定期で交流イベント「ソノノチカフェ」を実施するなど、多くの新たな広報的な試みがなされたのも当企画の特徴 ⇒関連グッズは、俳優5人の記憶のヒアリングを通して制作された
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パフォーマンス稽古</li> <li>●会場訪問（7月1日）</li> <li>●公開リハ（7月15日）</li> <li>●仕込み（7月17日～）</li> <li>●展示開催・パフォーマンス上演（7月21日-23日）</li> </ul>	⇒パフォーマンスの構成に「レイヤー」の考え方が導入され、観客と俳優の境界を越境する作品構成が固まりはじめる ⇒俳優、衣装、舞台という視覚的要素が相互に参照しながら作品が完成に向かっていく ⇒「アフタートーク」でも言及された、タイトルが間のスペースなしに統一される  

## 2. 創作過程を振り返って

### ▼ステートメント

わたしには、乳歯はもう二度と生えてこない。  
逆上がりができたとき。白髪あるよ、と初めて  
言われたとき。人を好きになったとき。大切な  
人を失ったとき。

あのとき、どんな気持ちやったのかな。

季節が過ぎるように、わたしたちは新陳代謝を  
繰り返しながら、日々ゆっくり、ゆっくりと変  
化していく。その中で、どこかに忘れてきた“わ  
たし”のことを考える。彼女たちは薄いカーテン  
の重なるの向こう側にいて、そのほとんどが、  
いつか見えなくなるだろう。

そういえば。ふと思い出す。

かつてのわたしは、いつまでも変わらないため  
に、忘れないために作品をつくっていた。

だけど今は、そうではない。

すべてがカーテンの向こうへ行ってしまったと  
しても、彼女たちがわたしの一部になっている  
と信じていることができるとき。

あなたはきえる。わたしもきえる。

もっと遠くへ、漕ぎ出すために。

本日はお越し下さり、ありがとうございます。

これまで共に考え、経験を共有してくれた

Robin Owings と、クリエイションメンバーに  
心から感謝します。

ソノノチ 中谷和代

My baby teeth will never grow back.

The moment I managed a pull-over on the bar.

The moment someone noticed a gray in my hair.

The moment I fell in love. The moment I lost  
someone dear to me.

I wonder, what was I feeling in those moments?

We, with our bodily metabolism, slowly, slowly  
change, like seasons passing by. Amidst all of it,  
I think about the "me" I left behind somewhere.  
They are behind the thin, overlapped curtains,  
and will, most likely, vanish from sight someday.

Wait. I suddenly remembered.

In the past, I used to make pieces to stay the  
same, to never forget.

But now, that isn't the case.

The moment I can trust them to be part of me,  
even when everything is behind the curtain. You  
will disappear. I will disappear too. It's all to  
paddle out even farther.

Thank you for being here today.

I'd like to express my gratitude to Robin Owings  
and everyone on the team, who have shared their  
thoughts and experiences with me throughout the  
creative process.

Kazuyo Nakatani (Sononochi)



Fabric is the material closest to the body. It holds in the heat from our lives like a diary, and tells the story back to us. I like the way our clothes, our curtains, our sheets become artifacts of our lives, like landscapes. Fabric is sensual, something we want to instinctively touch, because it is always touching us. Until we are gone.

Used fabrics bring up feelings of loss and wonder for me, the same way I used to feel in my grandmother's closet and her stash of fabrics and clothing patterns, unfinished projects, daydreaming. We disappear, and for a time, our mark remains in the world, in the people and places and objects whose lives we have touched in our lifetime. We eventually disappear when those relationships no longer remain- at least, not in a form we recognize.

For me, there is something magical in this transition between being and non-being, kind of like the way sunrise and sunset are exquisitely beautiful times of day. It is the point of fading. The fragility and temporality of life fills me both with awe and joy, which inspires me to be more present in my own life.

Robin Owings

布は身体に最も近い素材である。布は、私たちの生活の熱を日記のように保持し、その物語を私たちに伝えてくれる。私は、服やカーテン、シーツが私たちの生活の遺跡になり、風景のようになるのが好きだ。布は感覚的で、本能的に触れたいものだ。なぜなら布はいつも体をさわっているから。私たちがいなくなるまでは。

使い古された布は、喪失感と驚きを私にもたらず。祖母のクローゼットや彼女の隠された布地や洋服の型紙、未完成のプロジェクト、白日夢を見ていたときと同じように。私たちが姿を消しても、しばらくの間、私たちの足跡は、私たちが生きている間に関わった人々や場所、物の中に残る。そのような関係がなくなると、私たちはやがて消えてしまう。少なくとも、私たちが認識できる形では。

私にとって、存在と非存在の間のこの移行には、何か不思議なものがある。日の出と日没が一日の中で絶妙に美しい時間であるのと似ている。色あせる瞬間。人生のはかなさと一時性は、私を畏怖と喜びで満たす。それは私自身の生活において、よりいっそう今この瞬間にいるよう私を鼓舞する。

ロビン オウイングス

==

Robin Owings

1991年米国アラバマ州出身。幼少期に合気道を始める。大学で人間生態学、植物学、美術を専攻。絵画・音楽・インスタレーション・パフォーマンス等様々な芸術作品を制作。2015年来日。合気道を続け、自然とアートを子ども達と体験することに力を入れている。HARAIZUMI ART DAYS!2020～2022にアーティストとして参加。

<http://www.robinowings.com>

## ▼出演者コメント



### 藤原 美保 *Miho Fujiwara*

これまでのランドスケープシアターの創作は、現地の地域で体験した出来事や、そこにある自然、その場所から受けたインスピレーションを動きのパーツとして取り上げていました。今回の作品ではそれぞれのパフォーマーがソロパーツを作るときに、自分自身の中から生まれたものが多かったと思います。これまでに自分が経験したことや過去の記憶など、自分自身と向き合うことがこれまでの作品よりも大きかったなと感じています。

作品を創作している最中に、祖父が亡くなりました。亡くなったその日の祖父はまだそこに寝ているようでした。次の日、湯灌をして棺に入った祖父を見ると、（あれ、おじいちゃんちょっと抜けてきてる）と思いました。その時に人の身体は器で、入れ物で、借り物なんだと、ふっと感じました。まだ私は生きていて、自分の意思で身体を動かして、自分の無意識で心臓も動いている。身体の脱力、かかる重力、重心の変化、それによって起こる身体の動きや伴う痛み、また自分の意思で動かす、力を抜いて器になる、また意思を持つ。

クーラーによる身体の冷え。ひとつ灯ったランプの灯りから温度を感じる。窓を開けると肌を撫でる暖かい風。聞こえる音の違い。野外と室内の、皮膚感覚の変化もあるかもしれません。ここ近年、ソノノチはランドスケープシアターを創作しており、言葉を発することが少なくなりました。身体表現に重きを置くようになり、身体のことを考えることが多くなりまし

た。私は『あなたはきえる』の作品を経て、より身体についての理解を深めたいという思いが強くなっています。人はいつか死ぬ。それまでずっと付き合っていく身体。痛みなどの不調が出たり、動かしづらくなったり病気になる。その身体を少しでも、楽に気持ちよく毎日を過ごしていけるように。自分自身も誰かも。



### 芦谷 康介 *Kosuke Ashiya*

「あなたはきえる」という言葉は捉え方によって色々な発想ができると思います。いかようにでも捉えられるので、創作をしていく中でさまざまなアイデアを出していきました。最終的には自分にとって「あなたはきえるとは何なのか」を問いかけ、自分なりの筋道のようなものを持たないと、思いました。それは自分自身の内面を見つめることでした。

過去を振り返り、消えていかないもの、大切な思い出、辛い経験など、確かにあるもの、また物理的にもう亡くなって会えない人も消えたわけではなく、居続ける。不在だけど存在する。それによって「私」は成り立っていて、「消えない」ということに気づきました。また、舞台芸術自体が一瞬一瞬消えていき、同時に生まれ続ける芸術であるということも改めて感じました。こういったことを感じたのが大きな変化となりました。そこからは感じたことの断片を作品のシーンひとつひとつに自分なりに落とし込んでいくような作業でした。

また、戯曲がある作品と違い、戯曲や戯曲の「役」に自分を近づけていくという作業ではなく、自分の感性や身体が創作に関わるという意味ですごくやりがいがありました。一緒に創作してくれたメンバーからもたくさんアイデアをもらいました。

美術作家のロビンさんの作品は舞台美術でありながら、パフォーマーと同じたずまいで空間を共有してくれているようで、日々インスタレーションから受け取るものが変わり、作品にとっても自分自身にとっても大きな存在でした。作品としても有機的に変化し続ける作品でもあったかなと感じています。



### 宇津木 千穂 *Chiho Utsugi*

「あなたがきえる」をつくっていて、変化を楽しむようになっていった気がします。

ひとつひとつの変化が、かけがえのない瞬間で、それを大切に拾っていくこと。拾うことは所有することとは違って、拾って、それを持つてみるのか、あったところに置くのか、それも自由。

それができたのは、消えた今までを誰も攻撃しなかったから。



### 岸本 昌也 *Masaya Kishimoto*

ここ数年「舞台の中に存在する自分」と「日常生活の自分」がほとんどおなじものになってきているような気がする。他人が書いた言葉、自分の知らないことについて、舞台上でわかったような振る舞いをするのが出来なくなってきた。「あなたはきえる」を経て、それは確信のようなものになった。

2023年5月の終わりから7月にかけての間、ちょうどみんながマスクを外し始めた頃「あなたはきえる」の練習が進んだ。

「こうでなくてはいけない」「こうしたほうがいい」という演じる上での魂胆をなるべく持たずに済んだ気がする。意図を持てばそれが見る人や空間や自分自身に対するストレスになるような気がした。そもそも演技をしていたのかもちょっとあやしい。

周りの騒音を排除しないこと、喉の渇きや体の疲れを無視しないこと、動いているかわからない細かい動作や遅い動作を見逃さないようにずっと待つこと、演技を肯定的に諦めること。それらを重要視すればするほど、“劇”の主人公を効率よく手放すことができる。面白くて新しい快感だった。

俳優それぞれが、いまあるこの場所、いまあるこの体と記憶、自分の中に起動する想像力を便りに、時には没入し、作品のタスクを進めてゆく。風景演劇は大きなスケールがゆっくりと動いていく中に、ヒトがなんとかギリギリ介在して、作品が作られているのだと想像する。

「あなたはきえる」は、室内の風景演劇なので、大きなスケールが存在しない。そのため「部屋」の機能を無意識に考えていた。屋根があって、壁があって、床があって、出口と入口と窓がある。「部屋」はヒトのために作られた場所なので、そこにいるヒトにフォーカスが集まってしまう。でも作中でヒトを見せたいわけではないように思ったので、私たち（俳優たち）は「容れ物」になった。水差しやコップと同じ存在。見る人は自己の記憶や経験を、容れ物の中に自由に投げ入れ（代入して）、空間や時間を感じていたのじゃないかと想像する。練習中・舞台上で他の俳優をみているときそんな気分になった。

今現在の自分は、どんどんと遠くに離れていってしまう。今朝、何を食べたかは覚えている。でもどんな手順で食べたのかははっきり覚えていない。どんどん忘れていってしまうし、忘却と消失が連続していつかは死ぬ。忘却と消失がヒトの機能で、自明なのだけれど、それすらも簡単に忘れてしまう。だから作中でも日常でもジタバタしてしまう。

弱くなるもの、消えるもの、遅くなるもの、小さくなるもの、低いもの、少ないもの、時期によって変わるもの、既に無いもの、不揃いなもの、濁っているもの、不明瞭・不鮮明なもの、あいまいな境界、濡れているもの。そういうものに加担してゆきたい。



## 筒井 菫奈子 *Kanako Tsutsui*

きえる、を聞くと怖いや悲しい印象を受けがちである。わたしはもともときえることに恐れがない性分である。使わなくなったものや要らなくなったものは躊躇なく手放す。しかし夫はその反対で、思い出や捨てることに対してじっくり考えて頭や心を動かして行動している。作品の作りはじめのまだ間もない頃は、手放すことについてなにも感じなかった。けれどふと作品が終わった今、手もとで思い出をほんのりと温めてもいいな、と感じている。作品と夫に感謝しながら。

もし変わらずにスッと手放したあとも、温もりはここにあるように思う。きえることは怖いことや悲しいことだけではない、貴重な温度を教えてくれる存在である。



撮影：脇田 友

## ▼クロストーク（スタッフ対談）



本作のクリエイションで構成・演出、美術制作、楽曲製作、衣装をそれぞれ担当した中谷和代、ロビン・オウイングス、瀬乃一郎、清川敦子。上演終了から1ヶ月が経とうとしていた8月19日、4名によるクロストークが行われました。以下はその記録からの抜粋です。

（モデレーター：柴田惇朗、渡邊裕史）

## ロビンとのコラボレーション

中谷 ロビンとはいつか一緒にやれたらいいなってずっと思ってた。彼女のつくる作品がすごく好きだった。しかも京都（\*ソノノチとロビンは共に活動拠点が京都）。

ロビン ありがとうございます。

中谷 「あなたはきえる」の最初の出発点になったイメージは、自分に差している光に気づく、変わるってこと。最初はそういうモチーフだった。enlightenment（啓発）とか。今の自分は消えて新しい自分になる、みたいな。

ロビン 「きえる」ことは、悪いことじゃないって話になって、私も結構 enlightenment の話と近いなと思って。自分とみんなは繋がってる。自分だけじゃなくて、きえることは境界がなくなることとかについて考えて。布も結構そのアイデアと繋がってるから。

中谷 線（糸）が寄りあって布になるっていうのは私も一番最初の段階で思ってた。今回、最初にアトリエみつしまでやろうかってなったもそこからやね。そこで個別の営みを重ねている、劇場の機能以外を備えた場所も視野に入れて探している。結構会場見にいったね、べっていさん。

渡邊 うん。ギャラリーをいくつか。光の入り方が素敵だった、っていうのが決め手だった？

中谷 その日も窓から光が差っていて、光の変化がすごく美しかったから、こういうのを演出に取り入れてできないかって。これまでずっと屋外で制作してたんですけど、いろんな変化が訪れるような場所で、その偶然を捕まえながらやりたいなって思ってた。勇気を持ってロビンにLINEして。

ロビン ありがとうございます。本当にタイミングが良くて。こういうプロジェクトを作っていく時間があったから嬉しい。

中谷 ロビンが初めてあそこ見た時の印象はどうだった？

ロビン 光に感動して。広いスペースだから、何かするならこれは大きいものを作って、いっぱいスペースを使いたい、というところから考えて。雰囲気や味があるスペースは私も好き。和代さんが作りたい作品と、私の作りたい作品の似ているところは、そういう雰囲気、スペースの味わい、自然とか時間が感じられるところ。

## 断片と忘却

清川 送っていただいた稽古動画を拝見してるけど、やっぱりその場の感じとかを受け取る限界はあって。だけど、かずさん（中谷）が方向性が変わったときにその都度ミーティングをしてくださったりとか、調整のタイミングを図ってくれてたので、一人だけ全然違うところに行くことはなかったと思うんです。

次に行った時の稽古で「何もなくなってる！」ってなることもあって。そこはもちろん、いろんなことをやってきての削ぎ落としというか、ほんまにここの部分が大事だって抽出した部分が残っていったっていうのはわかる。けど、ほんまになんもないなあ……ってなった時に、捨てるって言ったらあれですけど、かずさんの強さを感じましたね。

中谷 「忘れてもいいよね」って話になったんです、俳優さんと。稽古場で一度作ったものを、0から1、2、3……って積み上げて作っていくプロセスだと、0という前提を置いてしまった瞬間にそれ以外のものを置きにくくなるじゃないですか。0から1にしたら、（次は）2にしなきゃいけないし、2にしたら3にしなきゃいけないみたいなやり方だと、なかなか豊かにならへんから、みんなで色々考えた結果、一回忘れていこう、みたいな。一度場に出たことはあったこととして、もちろんじゅんろーくん（柴田）やnecoさんが文字や映像や写真でしっかり記録してくれてるから、無くなることはないの。全然違うでもいいから、新しいものを投げ込み続けようってなった。

ロビン 私は初めてソノノチのプロセスを見たから、いつもそういう風に作品を作ってるんかなって思ったけど、今回が初めてだった？

中谷 そうね。より酷くなってる、みたいな感じ（笑）。

ロビン 毎回（稽古で）違うことやってるからすごいなと思って。こんなにアイデア出てるのは。

中谷 そうそう。それは無駄にはならない。無かったわけじゃない、確実にあった。消えていい、って思えた時から稽古がワクワクする時間になっていって。稽古に来るの楽しい！ってみんな言ってくれてて、私も嬉しかった。

清川 それはすごくいいと思います。跡形もなくなっていくとか、道が開けたんやな、よし行こうっていうのが、見てわかる。それにちゃんと私とか（他の）スタッフも、置いていかずに引っ張っていってくれはるので。

中谷 道を開いたのは、俳優さんのおかげが大きいかな。私は目の前の道をずっと掘ってたけど、ハツとなって見たら横に誰もなくて、みんなバラバラ、あちこちに進んでた。まあいっか、それぞれに自分の道を行こ！みたいな感じでしたね。で、最後の地点でみんなが合流するって感じ。

## 見えないけどある、音

中谷 いちろーくん（瀬乃）と音楽の話をしていると、いつも俳優の話になってきて。たとえば俳優と俳優の距離や視線がどこまで近づいたらそこに関係があるように見えるのかというところから、音符と音符をどれだけ近づけたらどういうメロディにっていう話になったり。そういう風に演出や関係性の話からイメージを広げていくかんじ。

瀬乃 無音を作ってから流したい音を鳴らしてくってのが西洋表現の大前提というか基盤だと思うんですけど、アトリエみつしまでは救急車通るし、風の音鳴るし、エアコンは聞こえるし、スタートが0じゃなく5とか10あるところに僕が作ったものを流すことで、ある意味違和感が薄いし、逆にすごい違和感があったりするっていう。無音の劇場とはやっぱり違うのでそこを受け取りながらやってた感じですね。

中谷 なぜ音が鳴るのか、音をどう扱うかっていう話を随分したね。

瀬乃 そうですね。鳴るのに必要な理由とか背景とかそういうのを僕が切実に求めているんだと思います。今回、ロビンさんの布の作品とか俳優によって表現される、いること・いないことっていう存在のレイヤーと、見える見えないっていう可視・不可視のレイヤー。「見えないけどいる」をどうやったらパラダイムシフトできるかなって思った時に、音は便利だなと思って。そこを飛び越えることで、鳴ることで、ないけどいるかもしれないっていう共感を生むには、音は一回鳴ったほうが逆にリアルだなんて思えたのが、僕の中でひとつの着地点で。

中谷 『あなたはきえる』に関して、音は必要だと思ってたんだよね。まさに「見えないけどいる（ある）」ものをとらえるために。音とか、雰囲気とか、気配とか、匂いだったり、いろんなものに支えられてる。そしてきえるには、いる（ある）必要がある。

## 作品をめぐる時間

瀬乃 この作品を見て改めて思ったんですけど、やっぱり1秒とか1分をルーペや虫眼鏡で拡大して見てるような。1時間を1日でみてるみたいな。すごい時間がゆっくり流れてる感じがあったんです。ソノノチさん（の作品）は鑑賞してる時間がクロノス時間じゃないっていうか物理的、規則的な時間っていうよりは、伸び縮みする感覚がある。エアコンが切れた瞬間、（\*作中、エアコンを切ることで空間が静かになる演出がある）「あ、なんか（時間が）速くなった気がする」とか色々考えたんです。観ている間は没頭しているから長く感じるのか。いや、逆に短いかもしれない。時計の時間とはズレがあって。

中谷 ロビンも時間のこと言ってくれてた。何回もパフォーマンスを見てくれた中で、1時間とは思わなかった、って言ってくれてた気がする。あつという間に終わっちゃったみたいな。

ロビン 土曜日から日曜日の昼のパフォーマンスが一瞬で終わった気がした。本当に日によって違って、何回も同じパフォーマンス見ると、自分の時間を感じました。やっぱり自分の感覚が変化してる。こんなに変わってるのはちょっとびっくりする。

中谷 人間ってさ、自分の周りの環境を変えていくじゃない？たとえば昨日、原泉は暑くて（\*クロストークの当日、中谷、ロビン、渡邊は静岡・原泉に滞在していた）。泊まってる所にはエアコンがあるんですよ。洗濯物干したら湿度が80%超えてると思うんだけど、暑すぎて

寝れんくって、一瞬だけエアコンつけさせてもらった。そしたらめっちゃ涼しくなって、幸せって思ったんだけど、同時に、エアコンみたいに外から環境（＝時間の感覚）を変えるって話と、自分自身をそこに適応させるみたいな話が、両方パフォーマンスを見てる時に起こってたんじゃないかなってことを思って。パフォーマンスの中にある時間と自分の時間。周りが変わっていったのか、それとも自分が変わっていくのか。そんな作品を観る心地はどうだったかな、やってる心地はどうだったかなみたいな。私はそのどちらでもない（観客でもパフォーマーでもない）人として思ってる。

柴田 敦子さんにとって、「時間」はキーワードだったんですか？

清川 見てる時は、私は自分の時間しか考えてなかった。いろんな話聞いててやっぱ面白いなって思ったのは、見るところが人によって全然違う。私は音よりは視覚的なところを中心に見た。今の時間の話で言うと、はるばる会場まで行って、こうやって座って眺めて帰るまで、あの座って観劇してた時間って、すごい贅沢というか。あんなこと無くないですか。偶然を目撃するためだけに座ってられる時間っていうのがすごく贅沢で。非現実と言ったらそんなかな。自分が今過ごしてる時間と、見てる時間の差を体感してた。

中谷 贅沢やって言ってくれてましたね。

清川 どっちかっていうと、私は今まで何をしてきたんだろう、みたいな。そういうのを思い出せたりする時間でもあった。ロビンの布とかから懐かしさとか、それでたまに氷の音とか、すごい最後にドラマティックになっていくというか、明日も生きていくよーみたいな。私はそういう時間の感じ方やったんで。

中谷 見てる時間だけじゃなくて、遠くまで行って帰るまで、ひと繋ぎの体験っていう。

清川 そう、それはめっちゃくちゃありましたね。真夏に2時間弱かけて往復しなあかんはずなのに、なんか疲れた感じはあんまなかったんですよ。行く時間も帰る時間も考える時間やった気がする。

中谷 その時間考えてた？

清川 考えてた。考えるの好きやから、プラスもマイナスも考えてしまうから、ずっと考えてた。それはすごい大事な時間。大事な時間をもらった気がする。

中谷 私がランドスケープシアターを作った頃から感じてるのは、アウトプットがシンプルだったとしても、これだけの考えとか言葉を紡いで初めてあれができるんだなっていうか。あれがいきなり生まれることはまずない。今回もキーワードカード（アイデアカード）を作って、「きえる」から思いつくことを挙げてみる。そのカードをウェブっぽく繋いで、その中から試してみたいものを選んだり。各々が今日私はこれをやりたいって持ってくるとか。その場の偶然性みたいなのも結構あったと思うんです。あえてやり方を決めない日も多くて、めっちゃ喋ってみようかっていう時もあれば、今日はまずやってみるっていう日もあった。こうやって振り返ってみると、最初は無形のものが、みんなと話していると徐々に言葉になっていくっていうのが不思議ですね。いつの間にか言葉で振り返れるようになってる。

## 布のテクスチャー

清川 作りはじめのきっかけは、ロビンと一緒に何回かあった感じで。ロビンの（インスタレーションの）布があったので、その質感ですかね初めは。私は色が先に降りてくるタイプなん



です。今回俳優が5人いたけど、どの人がどの色とかっていう（この作品はパフォーマーに）キャラクターがない。だから別にCさんとAさんの色がチェンジしても作品性が変わるわけではないなって思った。それよりも、大事なことはテクスチャーだなって。ざっくりいうと天然素材、経年劣化、少し時間が経っているものであったりとか、そういう素材感を大事にしたいなというところから始まって。

ただ難しいのは、ダンスとかだと振りが先にあるから、腕を魅力的に見せるためにこういう袖にします、とかができたりするんだけど、今回はどういう動きになるかわからへん。大事なところっていうのは多分「存在」やな、と思って。衣装ってまず体が見えてるもの、存在はあるけどそれをどう使うかは俳優陣に任すしかない。初めに素材とか色とかを持ってきて、その後この人は寝転ぶんやなとか、そういうことが決まってきた。ちょっとずつ決まっていって。ひらめきっていうよりは、みんな歩み寄ってくださった作品の作り方やった気がしましたね。最終的にロビンの布に穴が空いてるのをみて、きっしー（岸本）の衣装にも穴あけたりとか、最後まで結構（調整した）。

ロビン それを見て感動しました。稽古で敦子さんが作品と俳優を見てるのに気がついて。集中して見る目、作品との合わせ方はすごいなと感じました。

中谷 現場での感覚を研ぎ澄ませて調整していくところ、私もいつも注目してる。

ロビン 深いディテールまでちゃんと。

中谷 そう、ボタンひとつとか、ちょっとした切れ込みとかなんですけど。それが空間の中でしっかり効いてくるから。ワクワクして、マジシャンみたいやって思ってる。皆さんありがとうございます、本当に。

終わり



### 3. 作品に寄せられた声

#### ▼高木日向子さん（ポストパフォーマンストーク）

7月21日（金）17:00～の上演後、近年演出の中谷ともコラボレーションを行っている

作曲家・高木日向子さんをお招きし、アフタートークを行いました。そこで話された内容の抜粋です。



#### 前作、ランドスケープシアターについて

高木 ソノノチさんの作品をはじめて拝見したのは2年前ですね。静岡県掛川市の、駅からバスで1時間ぐらい。ランドスケープシアター、観た方たくさんいらっしゃると思うんですけど。

中谷 簡単に言うと屋外の風景の中、100mくらい離れたところに人が出てきてパフォーマンスをして、その中に地域の人が出てきたりとか、車が通ったりとかそういう日常との関係の中で行われるパフォーマンスのシリーズっていうのを、私たちはこの作品の直前までやっています。それはもう遠すぎて喋っても何も聞こえないぐらいの距離感ですね。

高木 だからこそ瞬間瞬間に物語を感じるというか、そのとき一番感動したところが、私は作曲家で音楽をやっているので、基本的にはコンサートホールで楽器を弾いてもらったりするんですけど、そこは外部の音が一切遮断された防音の空間なんですよ。同時に演奏される音に耳をすませるために作られた空間なわけなんですけど。ある意味それって、異常な空間じゃないですか。あれが異常な空間だということにはじめて気づいて（笑）。ランドスケープシアターっていう、自然がそこにある状態で演劇をされるっていうものを見たのが初めてだったので、すごい衝撃を受けて。その時からソノノチさんの大ファンになってしまったという経緯がありまして。

中谷 恐れ入ります（笑）。

高木 今日は本当に楽しみに、観させていただきました。

## 「完全協和音程」

高木 (作中に) オルゴールが鳴っていたと思うんです。私も作曲家としてテーマを持ってるんですけど、そのうちの一つが2000年前古代を生きていた人たちが、どういう風に音を聴いていたのかっていうところにすごい興味を持って。オルゴールっていうのはドレミファソラシドとちゃんと音が鳴ってるけど、2000年前はそんな音、すごく特別だったかもしれません。でも、今の私たちにとってはいろんなところに溢れている音ですよ。電車の発着音も、信号青になりましたよっていうときも、ドレミファソラシドに統一された音が鳴ってる。で、最初オルゴールの「ミ」の音が出て、次に「ラ」が来て、「ミ」と「ラ」。ちょうど4度離れてるんですけど、振動数が「3:4」かな、「完全協和音程」っていう神聖な響きで。

中谷 ヘー！そんなのがあるんですね。

高木 2000年前の人達にとっては、そこに神秘を感じていた時代があるんです。ただ、「ミ〜ラ」という4度の音形の幅に対して、そこに感動するというのことは、現代を生活している私たちにとっては難しいと思っていたんですけど。ソノノチさんが導いてくださった時間性の中で「ミ」と「ラ」の音程の幅に感動することができたんです。

中谷 まあもちろん、分かってやっておりますよ……（笑）。そんなことを感じていただけるなんて、高木さんが来て下さらなかつたらこんな話できなかったですね。

高木 俳優さんが作った時間の流れっていうのは、2000年前もおそらく流れていたであろう時間で、私たちの本来の時間の流れにだんだんと慣れるように、導いてくださって。それだけですごい感動があつて。

## タイトルのスペース

高木 (パフォーマンスの) 題名をちょっとだけ変えられたそうですね。

『あなたは きえる』だったのが『あなたはきえる』に、作られてる段階で思うことがあつて変えられたつてお聞きして。途中ですこし止まるよりは、スツと。言語化するのが難しいですけど……

中谷 はい。お手元のチラシには『あなたは (スペース) きえる』なんですが、それが制作の過程で『あなたはきえる』になった。

高木 なんか、やっぱりこの舞台を最後まで観ると、言語化するのは難しいけどそう思われた理由がすごくわかるなど。細かいことかもしれないけど、(スペースがあると)『あなたは』でちょっと時間が中断されているような感じがする。

中谷 今ここでお話をしてる中で、あつもしかして、と思ったんですけど。このチラシを作ってる段階つて、まだ本番の3ヶ月前とかの段階なんですよ。なので、私の中でも『あなたは……』その続きは何か？みたいな。なくなるとか、いなくなるとか、最初タイトル案を考えているときに、『あなたは……きえる』つて感じで、当初スペースありのタイトルになったのかも。今では、確信を持ったからなのかな、と思います。この作品は『あなたはきえる』やな、っていう。

終わり

## ▼高内洋子さん（寄稿文）

上演会場「アトリエみつしま Sawa-Tadori」の高内洋子さんに作品を鑑賞いただき、「上演を見たとき／見たあとに自分の中で起こったこと」を書いていただきました。



230424：制作初期段階、会場見学の様子

規則正しいセミの声が、この古びた場所へと私を引き戻した。私は少しほっとして、少しがっかりした。いま過ぎた時間がもう懐かしい。

その出来事は、まるでずっと前から続く営みの延長のようだったので、私は自分が「いまここにいる」ということを何度も思い出さなければならなかった。あの日私は少し繊細になっていたし、自失することをおそれて踏みとどまろうとしていたのかもしれない。ほんとうはもう、消えてしまっていたのに。

ここで見たものは確かに存在したはずなのに、いまも判然としないのはなぜだろう。でもその出来事の経験は、やわらかに揺れていたあの布々のように、透けてしまいそうな儚さをもって私の中に淡くとどまり続けている。

その後のソノノチは私の生活に穏やかな痕跡を残した。誰もいなくなったギャラリーに響くセミの声は、あの日のものとは確かに違う。それでもなお続く営みの中で、私は消えてしまった出来事を思い出している。



撮影：脇田友

## ▼福井裕孝さん（評論文）

### 風景を眺めるために——『あなたはきえる』レビュー

福井裕孝

連日の猛暑ですっかりくたびれそうになりながら、自転車で30分ほどかけてようやく会場のアトリエみつしまに着いた。入り口で迎えてくださった制作のべっていー（渡邊裕史）さんと挨拶を交わした後、「開演までこちらでお待ちください」と、舞台とは別のこじんまりとした座敷へと案内された。開演を待つ観客がパラパラと座っているなか演出の中谷さんが挨拶に回っていた。少しして整理番号順に舞台へと案内される。かつては織物工場だった場所とのことで、それらしい痕跡が残る梁や壁面などはそのままに、エアコンやレールライトが取り付けられ「スペース」と化している。天井からは本作のモチーフらしき布が点々と吊るされていて、その向こうに俳優らしき人影が見えたり見えなかったりする。これまでソノノチが取り組んできた「風景演劇（ランドスケープシアター）」というシリーズに続く新作パフォーマンス作品とのことで、その言葉からなんとなく連想されるイメージ通りというか、場内は落ち着いた雰囲気にもまれていた。

エアコンが涼しくて最高である。

前説があって間もなく上演がはじまった。布の向こう側にいた俳優が舞台上をゆったりとした歩調で静かに移動しはじめる。動くのをやめたと思ったら、今度は別の場所にいた俳優がまた動きはじめる。

「歩く」「見る」「座る」といった単純な行為や仕草ばかりで、それ自体が何かをあらわしている感じはなく、そのうち規則性や物語性が見えてくる感じでもない。とにかくこの場を刺激しないような控えめなふるまい、いまここに流れている時間と空間の流れに寄り添うようなやさしい演技に徹している。彼らは何をしているのか。彼らは「注意」を促している。その身振りや視線の先にある何かに。俳優の一人が立ち止まってある方向を見る。その動作自体に特別な意味が込められているわけでも、それから想像が喚起されるわけでもない。ただ方向が示される。ほかの観客がそうしたように私もその方向に視線をやる。何か目新しいものや注目すべきものが待ち受けているわけでもなく、私たちが注意を向ける前からそこにあったアトリエみつしまの壁や美術の布があるので、そこにそのようにしてあったのだなと気付いたり、思い出したりする。俳優の身振りや視線によって「風景」の輪郭がなぞられていく。ここでの彼らの役割は、新たにイメージを立ち上げ「風景」を上書きすることではなく、いまこの「風景」が膠着しないよう視線を投げかけ、身振りを繰り出すことであり、彼らの抑制の効いたふるまいが、あるがままの「風景」に対するわずかな抵抗として、かろうじて時間を繋ぎ止め、紡いでいくのだった。私たち観客は彼らの眼差しに促されるようにして、いまこの「風景」と出会い直す。

俳優たちが静かで繊細な演技に徹しているのに対し、エアコンは構うことなく大きな音をさせ、自分の仕事に従事している。皆それぞれに役割がある。エアコンは場内に快適な空気を供給してくれている。私は客席に座って、これを書くために時折メモを取りながら静かに上演を見ている。

「風景」はじっと「見る」というより、ぼーっと「眺める」といった方がしっくりくる。そして「見る」よりも「眺める」の方が、観客にとってなんとなく気楽というか、どこか自由で平等な雰囲気もあってイイ感じがする。「見る」が「眺める」と言い換えられるとき、中心が失われる。対象がぼやけ、視界が広がっていく。それでも「見る」ことに慣れ切った私たちの平凡な視線は中心を求めて宙を彷徨

う。どこかに「見る」べきものがあるはずだという期待や欲望に駆られて。「見る」というのは、同時にほかの何かを「見ない」ことである。そう考えると「眺める」というのは、何かを「見ない」ということをせずして「見る」ようなことで、それは結局のところ何も「見ていない」のであり、いわば「見る」ことに失敗し続けたまま、移り変わりゆく現実を前にして力無くウンウンと頷くことしかできない主体があるというような状態なんじゃないか。現にこれを書いているいま、そこで「見た」はずのものやことをほとんど思い出すことができない。

#### ■そこで「見た」もののメモ

壁 人 エアコン ピッチャーの結露した水滴 氷 カメラ カメラマン 布についたしわ 布のたわみ 影 木 山っぼいモチーフ（布） スタンドライト マイクのもふもふ 背の高い人 窓越しに漏れる外光 OSB 合板 裸足 家っぼいモチーフ（布）

前に座っていた人がウトウトしはじめたので、自分も倣って目を閉じてみた。家に置いてきた仕事や日々のつまらない心配事などは一切忘れて、自由に「風景」を想像してみる。脳裏に浮かんだのは、親戚の家の近くに広がる棚田の風景。デカイ空。遠くに望める山々。年明けの澄んだ冷たい空気が鼻を抜けていき、土の匂いがツンと香る。誰しも「風景」へのあこがれというものがあるんじゃないだろうか。「風景」には全部がある。それを眺めているだけのちっぽけで無力な「私」以外の全部がある。その壮大なスケールに包まれながら消えていくことができればどんなにいいだろうと想像する。「風景演劇」とは、そういった素朴なあこがれを喚起し、満たしてくれるようなパフォーマンスだったのだろうか。このまま眠りにつくことができたなら幸せだろうなと思いながら、想像が尽きたところで目を閉じるのをやめた。

なんとなく終わりを意識し始めたころ、突然エアコンの電源が消された。静寂が訪れ、エアコンの稼働音の背後に隠れていたさまざまな音が聞こえるようになる。そして、俳優の手によって舞台奥の窓が開けられ、「外」の新鮮な音や光が場内に注ぎ込まれた。その間、沈黙させられたエアコンについて考えていた。もう十分に空間は冷やしてくれたし、ここは「外」の環境音や場内の音の気配を楽しむ時間なのでお役御免ということだろうし、自分の余計な気分に過ぎないのだけれど、これまでの俳優たちの浮世離れした繊細なふるまいに比べて、エアコンの電源を消すという操作はとても大胆で俗っぽく、人間らしい手つきに感じられた。そのことを少し残念に思ったのと同時に、どこか不思議とほっとした気持ちにもなった。上演が終わって「外」に出ると来る時よりも一層陽が照り付け、蒸し風呂のような暑さになっていた。エアコンの風を懐かしく思いながら帰った。

==

福井裕孝

1996年京都生まれ。演出家。人・もの・空間の関係を演劇的な技法を用いて再編し、その場に生まれる状況を作品化する。近作に、テーブルの上を舞台上で上演する『デスクトップ・シアター』（2021）、劇場の不可視化された「もの」を観察し、記録する『シアターマテリアル』（2020,2022）など。ロームシアター京都×京都芸術センター-U35創造支援プログラム“KIPPU”選出。2022年度より THEATRE E9 KYOTO アソシエイトアーティスト。

## ▼アンケートより（抜粋）

心地よくまどろみながら見ていました。  
遠くで何かが起こっている予感と想像が  
喚起されて、自分が見ている風景なのか、  
想像上の出来事なのかわからなくなる瞬間  
がありました。  
最後に屋外から現実の音が聞こえてきて  
何かがよみがえったような感じがしました。

\*\*\*

布、めちゃくちゃ良いなと思いました。  
出演者の方が見える／見えないという効果  
だけではなく、この場所で見ている唯一の  
私の存在も意識させられました。  
また、皆さんの影や逆光で浮かびあがる  
シルエットも美しく、見とれました。  
1人で動いたり、複数で動いたり、見えたり  
見えなかったり、外から音が聞こえたり…  
生活ってこういう感じだよなあと思って  
見ていたのですが、最後に窓が開いたとき、  
見ながら感じていた「生活」と実際に進んで  
いる「生活」が繋がったように感じられ  
すごく良かったです。

\*\*\*

瞑想をするような不思議な時間でした。  
出演者と織物の静かなたたずまい  
時間が成立するという意思を感じました  
意味にならないぎりぎりの感覚が印象的でした

\*\*\*

一番きもちが良く感じたのはもしかしたら、  
何かをもとめられていない、おしつけられて  
いない空間で、自分は、何をしてもいいと  
いう何かたんぼされている、あんしん感が  
あったのかほんとうにきもちよくて、  
帰りたくないな～って思いました。  
ほっとかれているともぜんぜんちがう。





母屋の縁側みたい。

足の動き 機織りとかミシンを踏んでいるように  
見えた。衣装と吊り下げてある布の一部の一致  
映像をみているような 記憶の中にいるような  
ふと、母屋の仏だんのような お寺のような  
においが自分の鼻に入ってきて、もっとはっきり  
においを なつかしい記憶のにおいを感じたくて、  
何回か息を吸い込んだとき、ここにいると思った。

\*\*\*

人生に足りていない時間を補っている感覚でした。最近五感をこういう使い方してなかったかもなあ、と。

\*\*\*

ソノノチさんの室内上演をアトリエみつしまさんの空間で体験することに期待して参りました。

期待以上のパフォーマンスでした。

植物が組織を変えて別の存在になった布は人間と外の世界を隔てるとともに結ぶものです。

衣は人の形を取ります。衣服を身につけて外出している私たち人間の身体が消えてしまったとき残された衣たちが人影ならぬ衣影となって、かつて布地を生み出していたこの空間で想いをめぐらしている。

そのような Vision として拝見いたしました。

\*\*\*

こんなふう大きく深い呼吸をする“場”に人を置くと、人のかすかな呼吸を聞き取ることは難しい。でもどんなにりんかくがぼやけていても、灯されたランプのように確かにそこにあることを感じられる、気がする。実在は触ることでしか確かめられない、出しかけた手は何も触れていないけれど、その出しかけた手の存在までは否定できない。

(撮影：脇田 友)





## 4. カンパニー紹介



撮影：中谷利明

旅するパフォーマンス・アートグループ。京都を拠点に2013年1月より活動を開始。空間が内包する膨大な情報を、観客の中に流れる時間や記憶と結びつける独自の演出手法で作品を発表している。初めて観るのにどこか懐かしいと感じたり、何気ない生活を垣間見ているような感覚を味わえたり、内なる感情を静かに揺さぶることに特徴がある。近年は、空間そのものを作品として捉えるインスタレーションの手法を用い、劇場だけでなく屋外・空き家での上演や、絵画・音楽・建築など他分野のアーティストとのコラボレーションも行う。主なメンバーは、中谷和代（演出家・劇作家）、藤原美保（俳優）、渡邊裕史（制作）。2016年4月～アートコミュニティスペース KAIKA（京都市下京区）アソシエイトカンパニー。昨年5月、カンパニーのマネジメント部門を法人化。



### 中谷和代

1985年生まれ。演出家、劇作家、俳優。ソノノチ代表。

本公演のほか、ミュージカル、市民劇、音楽コンサートなどの演出も手がける。劇作の他にはワークショップデザイナー、イベントディレクターとして活動。2012年頃から演劇教育に興味をもち、演劇ワークショップの効果測定プロジェクトへ参画。ほかにも文化庁、文科省の学校派遣事業や、高校・大学の講師業などを通して、人材育成に取り組む。2014年～2020年 NPO 法人京都舞台芸術協会理事。現在、日本演出家協会員／日本劇作家協会員。